



立正大学博物館 第9回企画展

立正大学のあゆみⅡ

# 軌跡と躍進



## ごあいさつ

平成 26 年は、大正 13 年に創立された立正大学文学部が 90 周年を迎えます。従来の大崎校地は、将来の飛躍を期して品川校地に変わりました。また昭和 56 年に熊谷校地に開設した法学部の品川校地移転が開始されました。天正 8(1580) 年以來の関東最古の伝統を誇る立正大学にあっても、特に注視される年であります。

立正大学博物館はこれを記念して、「立正大学の歩み・Ⅱ」の企画展示を開催することにしました。特に従来品川校地において大学に併設されていた立正中学・高校の馬込地区移転に伴って従前の施設は大学占有となりましたが、この中に施設担当者の努力によって博物館の展示箇所が確保されたのを機会に、品川校地における展示を意図したものです。

文学部は目出度く 90 周年を迎えたものの、さまざまな改革が遅れています。久々の改革を標榜する指導者の出現によって、急速な改革が期待されるところであります。

法学部は熊谷校地で開設し、以来 30 年さまざまな内部努力を行った結果の品川校地移転となったものです。8 学部総合大学の総体維持の方針にのっとった移転ですが、関連施設の拡充が後回しになっている現状であります。

すべての学部は立正の名のもとに統轄されます。各学部の卒業生はすべて立正の同窓生です。立正生としての誇り、同窓生としての誇りを持つような努力が必要です。歴史を回顧して伝統を確認することにより、気風が醸成されれば幸いです。

平成 26 年 6 月

立正大学博物館長 池上 悟

## 目次

### ごあいさつ

1. 立正大学の軌跡と躍進
2. 文学部のあゆみ
3. 法学部のあゆみ
4. 立正大学発祥の地 飯高檀林
5. 立正大学史略年表

### 【表紙の写真】

- 1 (飯高檀林講堂)
- 2 (旧校旗)
- 3 (第 16 代学長 石橋湛山先生)
- 4 (第 3 回卒業記念アルバム 歴史地理科)
- 5 (旧校章旗)
- 6 (法華経研究会)
- 7 (品川キャンパス)

### 【裏表紙の写真】

- 8 (立正大学海洋班の日章旗)
  - 9 (日蓮宗大学時代の講堂)
- ※ 1～9 立正大学史編纂室所蔵資料

## 例言

- (1) この図録は平成 26 (2014) 年 7 月 1 日 (火)～8 月 6 日 (水) 品川キャンパス、10 月 1 日 (水)～11 月 4 日 (火) 熊谷キャンパスに於いて開催する立正大学博物館第 9 回企画展「立正大学のあゆみⅡ―軌跡と躍進―」の展示図録として作成した。
- (2) この図録の編集・作成は、館長の指示により池田奈緒子 (当館学芸員) が担当した。
- (3) 展示資料及び図録掲載資料については、立正大学学園および立正大学史編纂室の全面的な協力を得た。
- (4) 企画展開催にあたって、特に参考にした文献は以下の通りである。
  - ・立正大学史編纂委員会『立正大学の 140 年』学校法人 立正大学学園 (2012 年)
  - ・立正大学法学会『立正大学法学部 創立三十周年記念論集』(2011 年)
  - ・立正大学文学部『立正大学文学部論叢第 55 号別冊―文学部 50 年の歩み―』(1976 年)
  - ・山下正治「立正大学校歌について」『立正大学博物館第 4 回企画展図録 立正大学のあゆみ』(2007 年)
  - ・安中尚史「日蓮宗大学林の設立について」『立正大学博物館第 4 回企画展図録 立正大学のあゆみ』(2007 年)

立正大学はその淵源を飯高檀林に求めることが出来ます。飯高檀林は、天正 8(1580)年に日蓮宗僧侶の教育・研究機関として下総国飯高郷(現千葉県匝瑳市飯高)に創設されました。檀林とは、せんだんりん 榊檀林の略で、僧侶の集りを榊檀(ビャクダンの異称。センダン科の落葉高木)の林にたとえ、仏教における学問所のことをいいます。飯高檀林は、295年間、諸檀林のなかでも最高所として多くの学僧を世に送り出してきましたが、明治維新によって近代教育に移るなかその社会的役割を終え、明治 8(1875)年に廢檀となりました。

日蓮宗では、明治 5(1872)年 8月に従来の諸檀林廢止の通達を出し、東京の芝、二本榎の承教寺に日蓮宗小教院(のちに宗教院と改称)を設置し、諸宗に先駆け一宗独立の教育機関を創設しました。明治 37(1904)年には、現在の品川東大崎の地に 3,000 余坪の土地を購入し、日蓮宗大学林として新たな出発をいたしました。そして、大正 13(1924)年 5月 17日、大学令による「立正大学」の認可があり、同時に財団法人立正大学・同学則も認可され、これにより、専門学校令による日蓮宗僧侶の教育機関であった大学から、一般学生も受け入れるようになりました。この時の組織は、研究科・学部・予科の 3科に分け、学部を宗教学・哲学・社会学・史学・文学の 5科とし、修学年限を予科 3年、研究科・学部は 3年以上としました。

また、翌 14年には旧日蓮宗大学を立正大学専門部とする認可を受け、宗教科・国語漢文科・歴史地理科の 3科を修学年限 3年として設置しました。こうして、「立正大学」として新たな発足をし、近代教育が行われていくようになりました。

その後、時代は変遷して、太平洋戦争へと動き、講義の中にも「軍事教練」として、大正 14(1925)年より中等程度以上の男子学校に陸軍

現役将校を配属して行われた軍事に関する訓練も入れられようになりました。戦局が厳しくなると立正大学の学生も横河電機・赤羽兵器廠・立川飛行場・月島軍需工場等に動員されました。

また、昭和 18(1943)年 10月 21日には明治神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会が行われ、12月 1日に第 1回学徒兵が入営しました。

昭和 20(1945)年 8月 15日、終戦を迎えると、経済状況の不安定の中、昭和 24(1949)年には新制立正大学の設置認可を受け、仏教学部(宗学科・仏教学科)・文学部(哲学科・史学科・国文学科・社会学科)を設置しました。翌年には、文学部英文学科を増設、経済学部を設置しました。昭和 26(1951)年 3月には専門学校令の廢止にともない立正大学専門部を廢止し、そして 4月に立正大学大学院文学研究科修士課程の設置の認可を受け、総合大学への一步を踏み出しました。

昭和 30年代後半になると、第 1次ベビーブームや、進学率上昇などで大崎キャンパスだけでは手狭になるほど学生数が増加し、新たに熊谷キャンパスの建設が始まりました。昭和 40(1965)年 1月から第 1期工事が始まり、第 3期工事を経て昭和 41(1966)年に短期大学部商経科が移設されました。翌年 4月には、教養部が開設され、熊谷キャンパスにおいて第 1回入学式が行われました。

昭和 60年代から現在にかけては、大崎キャンパス・熊谷キャンパスともに、順次再開発が起工され、増築やリニューアルがなされてきました。平成 24(2012)年には、明治 5(1872)年の立正大学創立より、開校 140周年という節目の年を迎えました。平成 26(2014)年には、大崎キャンパスに併設されていた立正中学・高校が馬込校舎への移転にともない、「品川キャンパス」と名称を改め、新たな立正大学がスタートしました。

## ひとつの回顧

—文学部 90 年の軌跡—



文学部長 齊藤 昇 教授

わが立正大学文学部は 1924(大正 13)年に創設された。すなわち、今年(2014年)はその創設から数えて 90 年目の年にあたる。試みに、『文学部論叢第 55 号別冊—文学部 50 年の歩み』を紐解くと、こう書かれている。「大正 13(1924)年 4 月 1 日、それはわが学部にとって記念すべき日である。なぜなら、立正大学の設立認可があり、日蓮宗大学が立正大学に衣替えし、文学部が誕生した日だからである。文学部の母体となった立正大学の揺籃は、明治 5 年 8 月、新居日薩師が芝二本榎承教寺に宗門教育機関としての〈宗学林〉を設けたときにはじまる。」

このように現在の 8 学部を擁する立正大学の中で、最も古い歴史と伝統を誇るのが文学部である。本学の初代文学部長は日蓮教学研究の泰斗として知られた清水龍山(後に第 8 代学長に就任)で、1927(昭和 2)年に文学部最初の卒業生を送り出している。

ここで特筆したいのは、慶應義塾で福沢諭吉に侍座し、アメリカの名門イェール大学で倫理学を修めて帰国すると、日蓮宗大学の専門部時代から立正大学文学部創設の頃にかけて「英語」や「倫理」などの科目を担当した柴田一能教授に纏わることもである。彼は文武両道に優れた人物で、自身も柔道二段の腕前の持ち主とい

うこともあり、いろいろな武道に精通していたようだ。そのような背景からであろうと思われるが、柴田はアメリカ滞在中に講道館の柔道をアメリカ国内に広めることに鋭意尽力したという。ある意味で、このように幅広い国際的な視野と深い専門的な知識を身につけるために海外に飛び出してみるという柴田の熱意と進取性は、明日を担う立正の若き新鋭たちの心を突き動かす原動力となったに相違ない。

たとえば、ドイツのマルブルク大学で哲学を修めた守屋貫教授(第 12 代立正大学学長)、オックスフォード大学留学を経て『日蓮上人御遺文』(山喜房仏書林)を著した加藤文雄教授、ロンドン大学留学の経験を持つ仏教社会学の権威、久保田正文教授(第 8 代本学文学部長)らのグローバルな視野に立った研究・教育活動は紛れもなくその影響を受けた典型である。

さらに、柴田一能教授は名著『法華経大講座』全 12 巻(平凡社)の刊行で知られる東京帝国大学の小林一郎教授に奉職を懇請してそれを実現させるなど、教授陣容の充実に努めた人物でもあった。

その他の顕著な功績を称えらば、それは晩年期を迎えた柴田が 1932(昭和 7)年に積年の念願であった立正診療院を東京の南千住に開き、真摯に地域医療に貢献した一事であろう。その診療所の内科医として手腕を振るったのは、若き日の武見太郎であった。ちなみに、武見は 1957(昭和 32)年に就任以来、13 期 25 年に亘って日本医師会会長を務め、また世界医師会(World Medical Association)の第 29 代会長としても医療の質向上のために労力を惜しなかった。

さて、時代は飛んで戦後復興から高度経済成長期を経て 1970 年代に入ると、本学への進学率の増加と歩調を合わせるかのように文学部の

学生が求める大学の理想像にも変化が現れた。すなわち、高度情報化社会への対応を視野に入れた学際的な研究・教育体制の再編が進められたのである。そして21世紀を迎えると、文学部は多面にわたる国際的な学術交流の充実を図るのは当然のことながら、専門性の高いアカデミック・リテラシー教育の質向上と幅広い教養と汎用性に富んだジェネリック・スキルの育成を目指して、さまざまなFD活動にも意欲的に取り組んでいる。このように建学の精神に基づく光輝ある歴史と伝統を踏まえつつ、文学部はさらなる高みを目指して、今後ともなお一層の努力を重ねていく所存である。

以上の回顧の一文の最後に、文学部90年の長い歴史の中で、昭和7(1932)年に「考古学標本室」としてその産声を上げ、そして立正大学開校130周年(2002年)を記念し、装いも新たにリニューアル・オープンした立正大学博物館(池上悟館長・文学部教授)の奥深い資料展示を旨とする普及啓発活動が先駆的かつ効果的に行われてきたことを特記しておきたい。

立正大学博物館は将来のミュージアム・ネット化構想の実現に向けての体制づくりの充実を図るとともに、考古学の発掘調査に伴う熊谷校地内遺跡出土資料やネパールティラウラコット遺跡出土資料などの貴重な収蔵資料を有効活用した活動を展開している。その国際的な広い視野をもった崇高な地域協働の理念を称揚し、今後とも益々の発展を祈念して筆を擱きたい。

西暦(年号)	事項
1924(大正13)年	文学部(宗教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科)を設置
1974(昭和22)年	地理学科増設
1949(昭和24)年	新制立正大学設置認可、文学部第1部(哲学科・史学科・国文学科・社会学科)、第2部(史学科・文学科・社会学科・地理学科)を設置
1950(昭和25)年	英文学科(第1部・第2部)増設
1952(昭和27)年	大学院文学研究科設置
1952(昭和28)年	『文学部論叢』創刊
1957(昭和32)年	第1部地理学科増設
1960(昭和35)年	博物館学芸員課程設置
1967(昭和42)年	教養部発足(熊谷校地開設)
1976(昭和51)年	公開講座開設
1978(昭和53)年	熊谷遺跡調査室・考古学陳列室開設
1986(昭和61)年	英文学科を英米文学科と名称変更
1995(平成7)年	教養部を廃止
2001(平成13)年	文学科設置、地理学科廃止
2002(平成14)年	立正大学博物館を熊谷校地に開設
2006(平成18)年	大崎4年一貫体制発足、図書館司書課程設置
2007(平成19)年	文学部全学生の大崎校舎での受講を開始
2014(平成26)年	文学部創設90周年を迎える

◆文学部略史



◆文学部論叢 第1号



◆英文学科のゼミ風景(昭和39年頃)



◆史学科生発掘風景(昭和39年頃)

## 法学部の歩み



法学部長 舟橋 哲教授

立正法学部の源流は1967年に設置された「法学研究室」に遡る。これは経済、経営、教養部所属の法学・政治学専攻教員により、研究・教育を有機的に実践するために設置された組織であった。

1978年、大学理事会は法学部開設を決定し、設置準備委員会を組織した。定員200名、熊谷キャンパスでの4年一環教育を行うという枠組みのもと、既存の法学部から一線を画し、現代社会に対応できる、新たな法学教育・研究の姿が模索された。その結果、「予防法学」、「実用法学」等の視点にたつて「指導的職業人の育成を目指す」という教育目標と、「手作り教育重視」、「隣接科目を意識した総合的カリキュラム」等の教育手法が考案された。これらは今なお立正法学部教育の柱であり続けている。

今日に至るまで、法学部は順調に発展、2011年には創立30周年を迎えた。歴史を教育面から振り返れば、市民大学（後の公開講座）開設（1983年）、資格取得等を目指す学生のための課外講座の開設（1987年）、ゼミ教育の充実（ゼミ論集（1987年）、同大会（1993））、高度な専門的職業人養成のための夜間主コース大学院の設置（1995年）、卒業後を意識したコース制カリキュラムの導入（1995年、2010年

に現行型に改正）などが、研究面からは、立正法学論集（1981年）、法制研究所年報（1996年）の創刊、NZオタゴ大学との協定締結（1999年）、公開シンポジウム（2004年～）などがあげられる。また、組織面からは、大学組織改編による専任教員数の増加（1995年26名、1997年には28名）、300名への学生定員増（2002年）、教育研究等の移転（1991年に熊谷2号館、2009年にはアカデミック、キューブへ）等が特筆すべきである。

法学部は2014年4月より、年次ごとに履修地を品川キャンパスに変更することが開始された。教育資源の効率的な配置の観点から、社会科学系3学部を集中させ、立正大学全体の活性化に資する趣旨である。また、品川キャンパス1期生向けには、経済学部、経営学部の一部授業も履修可能な相互履修制度が導入され、資格取得に向けた課外講座が他学部学生にも開放されている。他方、これまで学部の地域連携の核となってきた公開講座、法制研究所は熊谷に残置。誕生の地との縁を大切にしながら、より高みへと、立正法学部の第2ステージは着実に進行している。

西暦（年号）	事項
1967（昭和42）年	法学研究室設置
1968（昭和43）年	『立正法学』創刊
1981（昭和56）年	法学部法学科設置
1982（昭和57）年	『立正法学論集』創刊 法制研究所開設
1985（昭和60）年	法学部第1回卒業式が挙行される
1987（昭和62）年	『法学ゼミナル論集』創刊
1996（平成8）年	『法制研究所研究年報』創刊
2009（平成21）年	新校舎・アカデミックキューブに 法学部研究室移転
2010（平成23）年	法学部設立30周年
2012（平成26）年	品川キャンパスでの履修開始

## ◆法学部略史



## ◆創立当時に掲げられていた学部看板

## 4 立正大学発祥の地 飯高檀林



飯高檀林（飯高寺）は、千葉県匝瑳市の中心部から北方に約8kmの台地上に建てられた、法華宗（日蓮宗）の学問所です。その敷地面積は、67,667㎡です。

飯高檀林は、その前身である飯塚講肆において講義の補佐を努めていた教蔵院日生が、土地の有力者平山刑部の後援を得て飯高妙福寺に学室を開き、飯高檀林を開設したことに始まります。その後、第3代化主（学長）心性院日遠のときに檀林の組織・教育制度・諸設備の充実をはかり、飯高檀林の基礎を固め、全国にある諸檀林の中心として大檀林へと発展していきます。

飯高檀林では、名目部・四教儀部・集解部・観心部・玄義部・文句部・止観部・御書科の8課程を修学し、名目部に入学してから全課程を修了するまで早い者で13～15年、普通は20年かかったといわれています。

明治8年に飯高檀林は廃止されますが、現在も飯高寺境内には、当時の建物が保存されています。なかでも、講堂・鐘楼・鼓楼・総門は、昭和55年に国の重要文化財に指定されています。また、檀林跡地として境内全域が県指定史跡となっています。



◆講堂（重要文化財）



◆立正大学発祥之地石碑

檀林名	所在	開設年代	開設者
松崎檀林	下総松崎	大永年間 (1521-28)	常寂院日輝
飯高檀林	下総飯高	天正8年 (1580)	教蔵院日生
小西檀林	上総小西	天正18年 (1590)	通王院日祐
中村檀林	下総中村	慶長4年 (1599)	恵雲院日円
西谷檀林	甲斐身延	慶長9年 (1604)	心性院日遠
玉造檀林	下総玉造	寛永14年 (1637)	長遠院日遵
三昧堂檀林	常陸水戸	天和3年 (1683)	禅那院日忠
南谷檀林	武蔵池上	貞享年間 (1685頃)	妙悟院日玄
松ヶ崎檀林	京都松ヶ崎	天正8年 (1580)	教蔵院日生
求法院檀林	京都六条	天正11年 (1583)	一如院日重
東山檀林	京都東山	寛永元年 (1624)	顯寿院日演
鷹ヶ峰檀林	山城鷹ヶ峰	寛永4年 (1627)	寂照院日乾
山科檀林	山城宇治	寛永20年 (1643)	法性院日勇
鶏冠井檀林	京都鶏冠井	承応3年 (1654)	通明院日祥

◆日蓮宗諸檀林一覧



◆鼓楼（重要文化財）

## 5 立正大学略史年表



西暦(年号)	事項
1580(天正8)年	下総国飯高郷(千葉県匝瑳市飯高)に日蓮宗僧侶の教育・研究機関として飯高檀林を創設する
1872(明治5)年	教導職制度制定ならびに神仏合併大教院設立に伴い、日蓮宗小教院を東京芝二本榎(東京都港区高輪2丁目)に設立
1875(明治8)年	飯高檀林廃止
1904(明治37)年	専門学校令による日蓮宗大学林設立(専門科・高等科・中等科)
1907(明治40)年	日蓮宗大学と改称
1924(大正13)年	大学令による立正大学を設立 大崎校地に新校舎が完成 文学部(宗教学科・哲学科・社会学科・史学科・文学科)及び予科、研究科を設置
1925(大正14)年	日蓮宗大学を立正大学と改称、日蓮宗大学中等部を立正中学と改称 宗教科・国語漢文科・歴史地理科設置
1927(昭和2)年	立正大学第1回卒業式
1947(昭和22)年	文学部に地理学科増設
1949(昭和24)年	学校教育法により新制立正大学となる 仏教学部(仏教学科・宗学科)、文学部(哲学科・史学科・国文科・社会学科・地理学科)設置
1950(昭和25)年	文学部に英文科増設 経済学部、短期大学部設置
1951(昭和26)年	私立学校法により学校法人立正大学学園(立正大学・同短期大学部・立正高等学校・立正中学校)に改組 大学院文学研究科設置
1952(昭和27)年	石橋湛山、第16代学長に就任
1966(昭和41)年	短期大学部商経科、熊谷キャンパスに移設する
1967(昭和42)年	経営学部設置(大崎) 熊谷教養部開設

西暦(年号)	事項
1972(昭和47)年	開校100周年
1981(昭和56)年	法学部設置(熊谷)
1982(昭和57)年	開校110周年
1987(昭和62)年	大崎キャンパス再開発起工
1988(昭和63)年	大学院経済学研究科設置(大崎)
1992(平成4)年	開校120周年 大崎キャンパス再開発竣工
1994(平成6)年	大学院法学研究科設置(熊谷) 昼夜間講制・夜間主コース開設
1996(平成8)年	社会福祉学部(社会福祉学科・人間福祉学科)設置(熊谷)
1997(平成9)年	ユニデンス(熊谷学生寮)竣工
1998(平成10)年	地球環境科学部(環境システム学科・地理学科)設置(熊谷) 大学院経営学研究科設置(大崎)
2000(平成12)年	大学院地球環境科学研究科設置(熊谷) 大学院社会福祉学研究科設置(熊谷)
2002(平成14)年	開校130周年 心理学部(臨床心理学科)設置(大崎)
2004(平成16)年	総合学術情報センター竣工(大崎) 大学院心理学研究科設置(大崎)
2007(平成19)年	大崎・熊谷とも4年間一貫教育体制完成 大崎キャンパス、リニューアル工事完成 熊谷キャンパス、リニューアル工事開始 昼間主・夜間主コースを統合
2011(平成23)年	心理学部(対人・社会心理学科)設置(大崎)
2012(平成24)年	開校140周年
2014(平成26)年	立正中学・高校馬込新校舎へ移転 大崎キャンパスを品川キャンパスと改称 法学部、品川キャンパスで履修開始

8



9



第9回企画展 立正大学のあゆみⅡ—軌跡と躍進—

発行日 平成26年7月1日

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL: 048-536-6150 / FAX: 048-536-6170

E-mail: museum@ris.ac.jp

URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/>